



ぷらっとシネマ 帰郷しなかった者たちと歌う『ユッスー・ンドウール 魂の帰郷』（P・Y・ボルジョー監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15469



帰郷しなかった者たちと歌うー

『ユッサー・ンドゥール 魂の帰郷』(P-Y・ボルジョー監督)

かつての奴隷積出港のひとつ、ゴレ島から旅は始まる。ゴレの映像に、ユッサー・ンドゥールの歌声が重なる。ファルセットを使わないアフリカ式歌唱法で彼が力強く歌うー「知っておくべきことがある」。ンドゥールは大西洋を渡り、アメリカ各地でアフリカン・アメリカンのミュージシャンと出会い、共演の機会を重ねていく。アトランタではゴスペル合唱団と、ニューオーリンズではパーカッションのI・ムハンマドと、ニューヨークではコントラバス奏者のJ・カマックと。

ゴスペル、ブルース、ジャズといった新しい音楽の起源をつくったのが、「新世界」に連行されて奴隷とされた者たちであったのは偶然ではない。西洋音楽と違って、高い自由度と即興性を特徴とするその音楽は、互いに知らない者たちのあいだに共同性と連帯をつくりだしていく彼らの能力の証しでもあり、また、そうしないでは生きていけない切迫した状況の証しでもあった。アフリカ人の苦しみと希望に由来する点が、黒人音楽に共通していることをンドゥールは各地で感じとる。

彼の旅は、アメリカからヨーロッパへとつづき、行く先々で出会うミュージシャンを道連れに加えながら、最後にはゴレ島に戻ってくる。ルーツの地でコンサートが始まる。ジャズのインストゥルメンタルにのせて、ンドゥールのつややかな声が響く。映画冒頭で歌われた「知っておくべきことがある」という歌詞の意味が、旅の終わりのゴレ島ではっきり見えてくる。「過去を置き去りにしては未来を語れない」。ゴレで見えてくる過去とはむろん、奴隷貿易、奴隷制の過去である。

世界的に知られるセネガル人歌手ンドゥールをガイド役に据えて、アフリカを離れたアフリカ人の魂の旅を追う音楽ドキュメンタリーだ。そもそもドキュメンタリーの真骨頂は現場性と偶然性だが、その点で映像として輝く瞬間がいくつもある。たとえば、最後の訪問地ゴレで、現地の若者たちがドラムを叩く場にムハンマドが行きあわせ、セッションが湧きおこる場面。ムハンマドは、ニューオーリンズ出身の自分のなかにあるリズムの起源を若いアフリカ人のドラミングに聴く。また、かつて「積荷」とされた者たちを鎖に繋いで、船積みするまで「保管」した石づくりの暗い倉庫で、アトランタのゴスペル歌手たちが「母の涙した地、

ゴレ島に帰れ」と歌いだす場面。そしてもちろん、ンドゥールの歌と欧米世界に暮らすミュージシャンたちの演奏がつくりだす音楽的創造の場面。それらに立ち会えるだけでも十分に嬉しい作品だ。

しかし、本作が音楽的悦びに満ちているという指摘はだれもがするだろうから、私は、おそらく日本の評者があまり言わないことをここで書いておきたい。本作は、3つの点で抵抗の映画なのだ。第1に、90年代以来、主としてフランス発信の「ワールド・ミュージック」という文脈のなかに置かれてきたンドゥールを、その文脈からはずしていること。「ワールド・ミュージック」という語は、文字どおりに世界中の音楽を意味するわけではなく、旧仏領のマグレブ、西アフリカ、西インド出身のミュージシャンによる音楽を指す。音楽の脱西洋化とも見えるが、やはりフランス人のプロデュースする異文化のエキゾチックな彩りという面を否めない。本作では、ンドゥールが、ゴレから連行された奴隷の旅路をたどる点で、旧宗主国が定義する「世界の音楽」とは違っている。

第2に、ゴレ島からアメリカへという、かつての「中間航路」を中間ならぬ最初の旅としていること。17世紀にシステム化された三角貿易は、ヨーロッパを出発点とする。ヨーロッパからアフリカへというのが、三角形の第1辺だ。西アフリカ沿岸でガラクタの工業製品あれこれを売りながら、ゴレ島ほかの奴隷積出港で奴隷を集める。そこから新世界までが第2辺、つまり中間航路だ。三角形の3辺のなかで唯一、人が「積荷」となる。ンドゥールの旅は、積荷とされた者たちの苦しみを思いながらゴレに始まり、「中間航路」を「中間」とする商路を拒否して、終始アフリカ人の主体性を確認しながら進む。

第3に、原題でも邦題でも「帰る」旅であると言っているものの、実は本作は、帰らなかった者、帰れなかった者たちが新しい地でつくりだしたものがあると、ンドゥールが知る旅であること。帰郷しなかった者の子孫の演奏に、アフリカに生まれ育ったンドゥールのウォロフ語の歌が重なる——「耐えて生き延びろ」。帰ることなく、そこで耐えて生きた者たちが未来をつくりだしてきた。ンドゥールの敬意と自信が歌声に溢れている。

(スイス、2006年、112分)